特集　本シェルジュが読む「日本の大問題」への処方箋

第３章
コロナ後にチャンス到来？地方創生の行方

廣瀬　達也
兵庫県中小企業診断士協会

「地方創生」。コロナ禍の生活変化から改めて話題となることが増えたように感じるキーワードの１つです。

テレワークの普及，ワーケーションの注目度向上，地方移住についてのメディア報道の増加，そして，政府が打ち出している成長戦略の１つ「デジタル田園都市国家構想」。これらの流れからすると，「地方創生」は明らかに追い風です。

しかし，振り返ってみると，「地方を何とかしよう」とする国の施策は，名称を変えながら常に何かしら実施されています。そして，地方創生にかかわる活動を行っている人も常に存在しています。中小企業診断士の中でも実際に活動している方，興味を持っている方は少なくありません。

私自身，中小企業診断士になって初めて受講したプロコン育成塾の講義の中で，５年後になりたいプロコン像として「地域活性化伝道師になります」と発表してしまった１人です。その時は，講師の先輩診断士から「それは，今テレビでやっている『ナポレオンのナントカ』の診断士版ということか（唐沢寿明主演のTBSドラマ，日曜劇場「ナポレオンの村」のこと）」と冷ややかにコメントされ，オロオロしながら「まあ，そうです」と答えました。

そして，いまだに私は地域活性化伝道師にはなっておらず，国内の地域にかかわるさまざまな課題も解決していません。

１．まちづくりは幻想か

もちろん，活力ある街や地域は生まれ続けていますし，メディアに取り上げられたことで，有名になっているケースも少なくありません。それでも，「常に追い求めているが決して追いつけない」というストレスを感じてしまいます。

そんなストレスに対して，「これが問題なのだ」と痛いツボを押してくれるのが，『まちづくり幻想―地域再生はなぜこれほど失敗するのか―』（木下斉著）です。

まちづくり幻想
――地域再生はなぜこれほど失敗するのか

木下　斉　著
SBクリエイティブ

地方創生の最重要課題は「人口減少」の解決，女性を呼び戻すことが大切，他の地域の「成功事例」を学んで横展開，みんなで力を合わせて頑張るなどを，すべて「幻想である」とバッサリ。切れの良い文章で「幻想」に取りつかれ気味の読み手の思考を刺激してくれる。

木下氏は，高校時代から東京・早稲田商店街の活性化に参画したことで著名なまちづくり専門家。最近は，noteの有料コンテンツ

「狂犬の本音」で多数のフォロワーを持っている方です。

本書は，大企業の地方拠点は手放しに良いことではない理由の説明から始まります。最近，話題となったパソナの淡路島進出については，「メディアは，『大企業が東京に見切りをつけて地方に移転する』というストーリーが大好きなので，『地方の時代だ！』と盛り上がるが，それを鵜呑みにするのではなく，細かく実態をみなければいけない」などの切れの良いコメントが登場します（パソナの場合は本社機能の一部の移転であるため，法人登記上は東京の会社のまま。つまり，法人税を納める先は東京都のまま変わっていないようです）。

さらに，「地方創生とは，本来は稼ぐインセンティブを復活させ，地方が独自かつ多様な発展をしていくための権限と財源の一体的な移譲などを考えるものであったはずが，回復不可能な人口問題にすり替えられてしまった。

人口論に支配された地方活性化論はどこまでいっても無理が生じる。人口さえ増えればすべてが解決する，という幻想を捨て，先をみた思考が必要」と木下氏の弁は続きます。「人口減少を何とかしないとどうしようもない」というのが地域の本音の場合もありそうですが，今一度その考えを再確認することが必要かもしれません。

本書では，まちづくりにかかわる思考の土台の大切さが軸となっています。他地域の成功事例をはじめ，わかりやすい答えを求める思考の土台がある限りは失敗が続きます。成功する人たちは，「成功の理由を自分で考え，自分たちのお金の範囲で失敗を繰り返し，改善を続けている。結果だけを真似ても意味がないことを理解している」と指摘しているのです。

そして，「学び，動く組織が地域を変える」ということも強調されています。地域においては官民双方の人事，そして意思決定層が学ぶことが大切と言い切ります。

そうした大切さの実践例として，住民向け政策説明のためのワークショップのコンサルタントへの高額外注をストップし，代わりに職員にワークショップの研修を受講させた自治体首長判断の事例が紹介されています。その理由は，コンサルタントへの外注では限られた回数しか実施できない。職員に学びがないから毎年外注することになる。職員を研修に出せばコンサルタントへの外注ほど費用がかからないうえに，継続的な実施が可能となり，職員のプライド向上にもなる，ということです。

このように，しっかりと人に投資するスタイルの効果は企業経営においても当てはまりますし，中小企業診断士としてもよく理解できます。

2．持続可能な地域づくりとSDGs

最近のトレンドワードの１つにもなっている「SDGs」。「国連が策定した地球レベルの巨大な目標」というイメージのSDGsですが，持続可能な地域を実現するために活用できる強力なツールです。

「誰一人取り残さない」という思想は，人口減少，高齢化，経済衰退などの多様な課題を抱える地域が，まさに必要としているものです。

持続可能な地域のつくり方
―未来を育む「人と経済の生態系」のデザイン

筧　裕介　著
英治出版

一過性のイベントやハコモノ頼みの施策ではなく，長期的かつ住民主体の地域づくりを目指す。そのためのツールとしてSDGsを活用。本書では，SDGsの考えに基づいたワークショップ運営の仕方も含めた丁寧な解説がなされている。

筧氏は，「地方創生のために，SDGs を強力な武器として活用できることが５つある」としています。

①未来地図：未来への旅路をナビゲートする
②共通言語：組織・セクターを超えて対話する
③地域づくりの入り口：みんながどこかに関心を持てる169ターゲット
④ものさし：世界レベルで地域の現状やSDGs 進捗を測る
⑤チェックリスト：誰一人取り残さないための検討リスト

国，地元自治体，地域住民，学校，地域内企業，地域外企業など，多様なステークホルダーが各自の立場・思惑で絡み合う地方創生。そのような領域の活動についてきちんと交通整理をするためにも，SDGs はツールとして有効になりそうです。

特に「生態系」という切り口での，地域の「育の生態系」の弱体化に関する分析が興味深い内容です。それは「町村部の中高生の学習意欲が政令指定都市の中高生に比べて低い」ことをあぶり出したものでした。地域が活力を維持するためには，中高生の学習意欲向上が必要という１つの課題が見えてきた事例といえます。

３．注目される地方創生の事例とは

地方創生には，島根県隠岐郡海士（あま）町などのように，多くの地域から参考にされる事例もあります。地方創生はある意味，終わりのない継続的な活動といえます。よって，短期的な人口増加，注目度向上という点を見て成功事例と呼ぶのは不適切かもしれません。

しかし，一時的にでも成果を上げている事例は，他の地域からも注目されることになります。事例をそのまま真似ることはできないとしても，関係者の行動，モチベーションの生まれ方などは大変参考になると思えます。

新潟県十日町市の山間部にある池谷集落も注目されている事例の１つです。

奇跡の集落
―廃村寸前「限界集落」からの再生
多田　朋孔・NPO 法人地域おこし　著
農山漁村文化協会

６世帯13名になった新潟県の村が，中越地震後，都市との交流の中で若い移住者を引き付け復活するまでを，元地域おこし協力隊員の目でリアルに描いている。ボランティアと集落の人の交流状況などの実話には説得力がある。

本書の「はじめに」で，「少子高齢化と過疎化の進む地域で外部との交流人口を増やし，移住者を呼び込みながら，行政・地域住民・よそ者がそれぞれに連携して地域おこしを進めていくために参考となるものとして書きました」と著者である多田氏自身が言っています。多田氏の実体験を盛り込んだ，取っ付きやすく理解しやすい，そして勇気をもらえる内容です。

４．人口減少地域・集落の尊厳

ここからは，本シェルジュのメンバーである園田泰造さんに入っていただき，地方創生について，さらに深掘りしていきたいと思います。

園田：廣瀬さんは今，大学院に通われています。経営学や MBA の関連ですか。

廣瀬：経営学とは少し違った領域の地域資源マネジメント専攻科というところで，地域にかかわる社会学的な勉強をしています。会社員も続けていますから，基本的に週末のみの通学です。

園田：大学院だと自分の論文を書くために，先行研究の調査で多くの論文を読んだりするのではないですか。

廣瀬：そうなのです。今年読んだ地域に関連した論文で衝撃を受けたものがありました。

近隣地域では有名な「踊り」という民俗芸能を持っている九州の過疎集落についての論文です。

園田：地域の人口問題や活性化にかかわる内容ですか。

廣瀬：人口問題にかかわるものだったのですが，活性化とは違っていたのです。

園田：つまり，「踊りを核にして集落を復活させる」といった内容ではないということですか。

廣瀬：そうです，復活ではない事例でした。過疎が進行し，「踊り」の踊り手が不足する中，その消滅を危惧する近隣集落から「他集落も含めた地域で連携して踊りを保存しましょう」というオファーが来ます。しかし，この集落はそのオファーを断り，「集落がなくなるまで，集落の住民のみで踊り続ける」という選択をした，というものでした。

園田：それは「踊り」が消滅してもよいということですか。

廣瀬：「最後の１人になるまで集落の住民で踊り続けること。それがこの『踊り』についての先祖との約束だから」というのが，その集落の選択の背景です。

園田：すごい判断ですね。「他の集落の人が踊り手に入った踊り」は，「その集落に伝承されている踊り」ではなくなってしまうということでしょうか。ある意味，潔いというか美しいというか。

廣瀬：私も驚きました。「過疎は止めなくてはいけない」，「地域の連携は正義」，「活気は取り戻さなくてはいけない」といった考えに縛られると，この集落の取った選択は理解できません。

園田：集落の尊厳を感じさせます。私たち中小企業診断士が普段慣れ親しんでいる経営や経済の観点では導き出されない選択です。

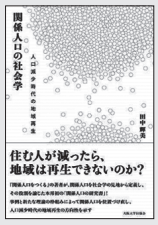
廣瀬：この集落の選択を理解するためには，社会学的な視点で住民の気持ちに寄り添ったフィールドワーク・分析・共感が必要となってくるように感じました。

園田：地域や集落にかかわろうとすると，企業や都市に接する場合の経営学，経済学の合理性とは異なる視点が必要となる場合もある，ということですね。

廣瀬：そうです。ただ，気持ちに寄り添った分析・共感は，実は中小企業と接するときにも必要なのではとも感じています。久しぶりの学生生活で，いろいろと知見を広めたいと思います。

そういった社会学的アプローチを実践しながら，関係人口の意味，人口減少問題についても切り込んでいるのが，最後に紹介する本です。

関係人口の社会学
―人口減少時代の地域再生



田中　輝美　著
大阪大学出版会

著者は「アカデミズムの作法を身につけたジャーナリストになりたい」というフリーのローカルジャーナリスト。自身の大阪大学大学院時代の博士論文をベースとした著作。丁寧な社会学的な作法で人口減少時代の地域再生の方向性を冷静に示してくれます。

廣瀬　達也
（ひろせ　たつや）
2015年中小企業診断士登録。兵庫県出身。ITベンダーに勤務。2021年４月より兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科博士前期課程に在籍。